

琉球大学学術リポジトリ

平成21年度全国学力・学習状況調査沖縄県結果の検討

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2010-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/16528

平成21年度全国学力・学習状況調査沖縄県結果の検討

藤原 幸男*

A Study of Results of Okinawa Prefecture's Elementary School Children and Junior High School Students in National Academic Ability Test and Learning Consciousness Report 2009

Yukio FUJIWARA*

はじめに

平成21年度全国学力・学習状況調査が2009年4月21日に実施され、その結果が同年8月28日に新聞紙上で発表された。この調査は、小学校6年生・中学校3年生（公立学校すべてと私立学校の一部）を対象にして、国語と算数・数学の「問題A（主として知識）」と「問題B（主として活用）」についての学力調査と、児童・生徒質問紙調査および学校質問紙調査（小学校・中学校）からなる。平成19年度に開始され、今回の調査は3年連続3回目となる。

私は沖縄県の児童・生徒の調査結果について地元新聞社から依頼を受けて「評論」を書き、またその後のデータ検討をもとに結果検討・分析の論文を投稿してきた。⁽¹⁾平成22年度からは4割程度の抽出調査に変更される予定⁽²⁾なので、次年度の全国学力・学習状況調査は過去3回とは性格の異なったものとなる。そこで本稿では、過去3回の調査データをもとに、過去2回の調査結果を含めて平成21年度の調査結果を検討し、調査結果に現れた限りにおける沖縄県の児童・生徒の学力の実態、学校および家庭における児童・生徒の生活と学習、学校における指導をめぐる実態などを明らかにすることを目的にする。⁽³⁾

1. 平成21年度全国学力・学習状況調査の性格

(1) 学力が向上したかどうかは不明

平成21年度の学力調査は、平成20年度の学力調査の問題の水準が高く、難しかったために、問題数を減らし、平易な問題も含めたという。問題作成を担当した国立教育政策研究所によれば、2008年度の問題は全体的に前年より問題数が多く、解答に時間がかかるものもあった。「時間内に最後の問題まで行き着かなかった子が多く、最後の方で正答率が悪かった」「これでは学力の実態がわかりにくい」という指摘がでたことを踏まえ、2009年度は多くの子が最後の問題まで取り組めるよう、出題内容を考えたという（「朝日新聞」2009年8月28日付）。

問題数を減らし、簡単に解ける問題を入れ、考えさせる問題に時間をかけるようにした結果、平成21年度の学力調査結果は、前年度と比べ多くの科目において全国平均点が上がった。とくに中学校国語Bは13.7点上昇し、中学校数学Bは7.7点、小学校算数Aは6.5点上昇している。全体的に問題が易しい方向に変化したのである。

このことについて各新聞は、「毎回、問題を理論的に一定の水準や難易度に設定できなければ、学力がどう変わったか比較できない」、（「朝日新

* 琉球大学教育学部教育学教室（Department of Education, College of Education, University of the Ryukyus.）

聞」2009年8月28日付)、「いちばんの問題は、学力が前年より上がったのか、下がったのか、経年比較できる仕組みになっていないことだ」(「沖縄タイムス」2009年9月1日付)と述べている。同感である。

(2) 測定する学力の内部構造のぶれ

「簡単に解ける問題を入れ、時間的に余裕をもたせて、活用にじっくり取り組ませた」ということは、学力構造をゆがめ、従来とは異なるメッセージを発信したことになる。算数・数学で言うと、A問題は手続き的知識を問う問題を多くしている。これは、概念理解に立った問題解決の位置づけを低め、ドリルの繰り返し練習による点数向上の正当性を認めるメッセージを発信しており、学力形成の内部構造にある種のゆがみをもたらすことになる。

(3) 都道府県間の点数向上競争の促進

朝日新聞・編集委員の山上浩二郎は、「経年変化を分析する基本設計がないのに、毎年、しかも悉皆(全員対象)調査する意味は何か。あえて探すなら、その年の全学校と子どもの平均を出し、相対的な位置を知ることしか浮かばない。…経年変化がないのなら、国が子どもたちをゴールのない競争に駆り立てているのと同じではないか」(「朝日新聞」2009年8月28日付)という。「文科学省自らは安全地帯にいて、各教委、学校を叱咤できるのだからなんとも都合のいい仕掛けだ」(「沖縄タイムス」2009年9月1日付)という指摘もある。平均得点の毎年の変動が大きく、安定せず、新聞紙上で公表されるのは都道府県ごとの教科・科目の得点と全国順位である。そこから明らかになるのは、学力テストの結果によって学力向上競争に駆り立てるとい性格である。

(4) 都道府県間の順位の固定化傾向

過去3年間の結果を見ると、教科・科目ごとの得点ランキングをみると、上位・下位の都道府県がほぼ固定化していて、都道府県間の相対的順位はあまり変わらなかったといえる。その意味で、得点ランキングの結果は偶然ではなく、構造的である。平成20年度の結果についてだが、「違った子どもたちが受け、かつ性質を異にする問題であったにもかかわらず結果が変らなかったことは、学力形成に『構造』が存在することを物語る」⁽⁴⁾と

いう耳塚寛明の指摘は、うなずける。沖縄県の3年間の結果を分析・検討し、沖縄県に特有に見られる学力形成の「構造」があるのかどうか、あるとすればそれは何かを解明する必要がある。

(5) 質問紙調査の対象者評価という性格

全国学力・学習状況調査は、学力調査の他に、児童・生徒質問紙調査、学校質問紙調査を実施している。これらの質問紙は設問数が多く、時間的な制約があつておおよその印象で回答したと想像される。それだけでなく、質問紙調査には、「正解」と思われる回答が見え隠れしており、それを意識して回答したと推測されるところもないわけではない。学力調査の得点ランキングと結び付けて質問紙調査が考察されることと合わせると、このことの可能性を考えないわけにはいかない。事実、それぞれの都道府県の回答を見ると、全国平均とほぼ同じ分布状況の回答もある。だが中には、かなりの違いがある設問もあるので、「正解」を意識しての回答の可能性という側面を見ながら、全国平均との差が大きくなった回答は注意して検討をする必要がある。

2. 平成21年度全国学力・学習状況調査沖縄県結果における教科・科目の得点結果

(1) 2つの教科・科目での最下位脱出

平成21年度の全国学力・学習状況調査沖縄県結果の大きな特徴は、平成21年度調査では2つの教科・科目、具体的には小学国語Bが46位、小学校算数Aが41位であり、過去2回における全教科・科目の全国最下位を脱出していることである。この事実についての評価は、2つの地元紙で分かっている。「沖縄タイムス」は「総合的に見ると3年連続最下位だった」とし、第1面に「学テ3年連続最下位」という見出しを付けた。これに対して「琉球新報」は、「全国学力テスト・沖縄2科目最下位脱出」という見出しを付けた(いずれも2009年8月28日付)。県内の2紙において、見解が大きく分かれたのである。

この見解の相違をどう考えるか。学力テストのそれぞれの教科・科目は質を異にしており、単純に「総合」できるものではない。また、「3年連続最下位」という評価は、この間の取り組みの成

果に水を差すものであると言わざるを得ない。そうではなくて、2教科・科目において、過去2回連続の全教科・科目最下位から脱出した事実をしっかりと見つめる必要があるように思える。

実は、すでに、平成20年度の調査において全国平均との差が縮小していた。その解釈をめぐって見解が分かれたが、平成21年度の結果と合わせて考えると、2教科・科目の最下位脱出、6教科・科目（小学校4科目全てと中学校国語B・数学A）における全国平均との差の縮小は着実な取り組みの成果が形になって現われた、とひとまず評価するのが妥当であろう。

(2) テスト対策による順位上昇

問題は、この成果が何によって生まれたかである。一つには、対策問題の反復練習である。冲教組委員長の本山隆司は、「現場は、対策問題をひたすら解かせて点数を上げるのに躍起で、先が見えず、授業改善に取り組む時間がない」という。また沖縄県PTA連合会の大田守会長は、「一部の成績が全国平均に近づいたが、そればペーパーテスト対策の結果だったらどうだろうか」と慎重な姿勢を示した（「沖縄タイムス」、2009年8月28日付）。学力テスト対策の傾向は全国的にみられるが、沖縄県では過熱化している。対策問題の反復練習によって、点数が上昇した可能性は高い。二つには、とりわけ小学校の教科・科目において、反復練習が有利に作用した可能性があるということである。とくに、小学校算数A（知識）は41位と大きく順位を上げたが、小田切忠人によれば、今回の算数A（知識）は、「概念的理解（意味的理解）を学習達成として求める設問が除かれ」、「手続き的な知識の獲得で『答え』が出せる問題になっている」。「手続き的な知識の獲得は、その手続きを覚え込むという仕方でもある程度は可能である」のであり、反復練習の効果が出やすい構造になっている、といえる（小田切忠人「小学校算数、知識見る問題は改善」、「沖縄タイムス」2009年8月28日付）。このことによって、41位への急上昇が説明できる。

だが、「覚えこんだだけの知識は過去問や類似問題で促成できるが、忘れやすく、『活用』の場面では働いてくれない」ので、B（活用）ではほとんど変化はなかったのである。こうしてみると、

反復練習による「定着」一辺倒ではなく、授業の中で意味理解を図り、現実の生活場面に「活用」して「活用の力」を育成することをていねいに行う必要がある。それなしには、B（活用）の上昇は望めない。

3. 児童質問紙調査

平成20年度と比べると、生活・学習状況はよくなっており、地域と連携して学校全体での取り組みが進んでいることをうかがわせるものである。にもかかわらず、沖縄県特有の課題は依然として残っている。（以下、回答の％を省略し、72.4％を72.4と表記する。なお、データは、基本的には、「している」「当てはまる」を取り上げ、「どちらかといえば」は取り上げないこととする。）

(1) 生活習慣・学習習慣

① 生活習慣

「朝食を毎日食べている」は「している」が85.8（全国平均88.5）で、少し低いといえる。過去2カ年の動向を見ると、平成19年度81.8（全国平均86.3）、平成20年度83.4（全国平均87.1）で、 -4.5 （平成19年度） $\Rightarrow -3.7$ （平成20年度） $\Rightarrow -2.7$ （平成21年度）と、全国平均との差を着実に縮小してきている。「朝ごはん運動」の推進の影響だろうが、良くなってきている。

睡眠についてだが、沖縄県の場合、「毎日、同じ時間に寝ている」は、「している」でみると33.4（全国平均37.5）で少ない。就寝時間も午後10時以降午前0時未満就寝者がかなり多い（沖縄県63.9、全国平均53.5）。沖縄県は夜型社会といわれるが、児童にあっても就寝リズムの不規則さ、就寝時間の遅さが翌日の学校での勉強に影響を与えていると思われる。学校開始時間は決まっております、そこから逆算して起床時間はほぼ決まるので、就寝が遅くなると寝不足になる。遅寝は翌日の授業に影響する。

ただ、過去3年間で見ると、だいぶ改善されてきている。就寝リズムでは、「している」は、平成20年度は30.0（全国平均35.2）だったのが平成21年度では33.4（全国平均37.5）と増加しており、全国平均との差も縮小している。就寝時間も、午後10時以降午前0時未満就寝者は平成19年度65.5

(全国平均54.5) →平成20年度66.2 (全国平均55.0) →平成21年度63.9 (全国平均53.5) と少しずつ少なくなっているが、まだまだ全国平均との差は大きいといわざるを得ない。

「学校に持っていくものの確かめ」は忘れ物防止に必要なだが、「している」の回答は、平成19年度は61.7 (全国平均64.0) と差があったが、平成20年度63.2 (全国平均63.8)、平成21年度64.0 (全国平均65.6) と年を経るにつれて少しずつ「確かめをしている」割合が増えている。

② 授業時間以外の学習時間と読書時間

授業時間外の学習時間は、平日では、1時間～3時間では、53.3 (全国平均45.6) と学習時間の割合が高く、よく学習しているといえる。これは平成19年度52.9 (全国平均47.0)、平成20年度51.9 (全国平均44.7) というように、過去3回においても一貫して沖縄県のほうが全国平均よりも高い。1時間～3時間の回答者を土・日でみると、これも平成19年度21.2 (全国平均16.6)、平成20年度20.7 (全国平均16.1)、平成21年度22.1 (全国平均16.2) とこれも沖縄県のほうが割合が高い。学習時間の量は多いといえる。

地元新聞では、「一方、授業時間外の学習量が全国平均を上回る結果が出た。子供たちが放課後や週末も熱心に学習している様子がうかがえる」(「沖縄タイムス」2009年8月28日)、「沖縄の子どもたちは大変まじめに、よく学習している」(浅野誠、「沖縄タイムス」2009年8月28日)と評価している。

読書についてみると、読書時間は、平日で30分以上2時間未満は32.5 (全国平均29.1) で、全国平均と比べると沖縄県のほうが割合が高い。「学校図書館・室や地域の図書館に行く」は、週に1～3回31.1 (全国平均14.9)、週に4回以上11.7 (全国平均3.3) と、全国平均と比べると圧倒的に沖縄県のほうが割合が高い。「読書は好き」は、「当てはまる」47.0 (全国平均46.4)、「どちらかといえば」を含めて「当てはまる」は75.5 (全国平均71.8) で、全国平均と比べて割合が高い。

こうしてみると、全体として沖縄県の児童は学習時間、読書時間が多く、読書も好きな子が多いという結果となっている。にもかかわらず、学力テストの得点では2教科を除いて全国最下位となっ

ているのはなぜなのか。学習の中味、学習方法の適切さに問題があるのではないか、読書の中味に問題があるのではないか、という疑いが生じてくる。

③ 学習塾への通い

「学習塾に通っていない」割合は、59.9 (全国平均52.4) で高い。経年変化で見ると、平成19年度64.2 (全国平均55.1) ⇒平成20年度59.8 (全国平均51.1) となっていて、平成19年度と比べると「学習塾に通っていない」割合が少なくなっている。保護者は平成19年度の「全科目全国最下位」という結果を受けて自発的に学習塾に通わせるという行動をとったのか、あるいは教師が家庭での学習を勧めていることを受けて学習塾通いが増えたのかは、わからないが、どちらかの影響で学習塾に子どもを通わせる割合が増えたと考えられる。塾での学習が学力調査の得点のどのように影響したのかは、不明である。

(2) 家での勉強方法

① 家での学習内容 (宿題・予習・復習)

「家で学校の宿題をしている」については、「している」という回答は年を経るにつれて増加し (平成19年度75.4⇒平成20年度77.3⇒平成21年度78.9)、全国平均との差は縮小しているものの (平成19年度-7.5⇒平成20年度-6.2)、平成21年度で見ると全国平均 (84.3) と比較してなお5.4低い。

「家で授業の予習をしている」は、「している」が18.4 (全国平均14.2) で、全国平均と比べてよくやっているといえる。経年変化を見ると、平成19年度14.2 (全国平均11.7) ⇒平成20年度17.0 (全国平均13.5) ⇒平成21年度18.4 (全国平均14.2) で、着実に増加している。「家で授業の復習をしている」は、「している」が35.6 (全国平均17.4) で全国平均の2倍である。経年変化を見ると、「している」という回答は年を経るにつれて増加し、全国平均と比較してはるかに良好である (平成19年度28.7<全国平均14.2>⇒平成20年度33.6<全国平均16.3>⇒平成21年度35.6<全国平均17.4>)。

つまり、「学校の宿題をしている」割合はやや低いものの、授業の予習・復習をしている割合は全国平均よりもかなり高いという結果となってい

る。

② 家での学習内容（苦手な教科、テストで間違えた問題の勉強）

「家で自分で計画を立てて勉強している」は「している」が25.2（全国平均23.3）、「家で苦手な教科の勉強をしている」は「している」23.7（全国平均19.4）、「家で、テストで間違えた問題について、間違えたところを後で勉強している」は「している」29.2（全国平均20.2）で、沖縄県の児童は全国平均を大きく上回っていて、よくしているといえる。

(3) 授業への意識と理解

① 国語の授業について

沖縄県の児童は、「国語の勉強は大切」（「当てはまる」は62.9<全国平均60.6>）で、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」（「当てはまる」57.1<全国平均49.0>）と思っているが、「国語の授業が好き」（「当てはまる」は19.1<全国平均21.6>）でやや少なく、「国語の授業はよく分かる」（「当てはまる」は29.3<全国平均34.1>）は全国平均と比べて少ない。つまり、「大切」で「社会に出たとき役に立つ」と思っているけど、それほど「好きでない」し、「分かる」と言い切れる子どもは少ないということになる。何によってこのような結果が出たのだろうか、検討が必要である。

② 算数の授業について

沖縄県の児童は、「算数の勉強は大切」（「当てはまる」は70.9<全国平均70.4>）で、「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」（「当てはまる」66.6<全国平均63.8>）と思っているが、「算数の授業はよく分かる」は「当てはまる」が40.7（全国平均44.6）で全国平均よりも少ない。つまり、国語と同じで、「大切」で「社会に出たとき役に立つ」と思っているけど、それほど「好きでない」し、「分かる」言い切れる児童は少ないということになる。なぜこのような結果が出たのだろうか、国語と同様に検討が必要である。

(4) 授業での学習活動

① 共同活動と発表・書く活動

沖縄県の児童は、「グループで調べる活動」「児童間で話し合う活動」は「当てはまる」が前者

15.5（全国平均14.8）、後者33.0（全国平均33.4）と全国平均並みに行っているが、「自分の考えを発表する機会」（「当てはまる」38.5<全国平均43.1>）、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしている」（「当てはまる」13.3<全国平均15.5>）、「意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」（「当てはまる」14.0<全国平均16.8>）、「自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている」（「当てはまる」22.9<全国平均24.6>）は、全国平均よりもやや低い。

「グループで調べる活動」「児童間で話し合う活動」といった共同活動は全国平均並みだが、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしている」「意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」「自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている」は、やや低い。これらの指導・支援には細密な注意と細やかさが必要となり、また児童自身の自覚的な取り組みが必要となる。この点で、少し弱いといえるのかもしれない。

② 問題の解き方と学習

「算数の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」は「当てはまる」44.0（全国平均44.9）で全国並み、「公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」は「当てはまる」45.6（全国平均42.8）で全国平均より高く良好であるが、「（算数の授業で）問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書く」は「当てはまる」41.6（全国平均46.8）で、全国平均よりも低い。「（国語で）ノートをていねいに書く」は「当てはまる」が32.5（全国平均36.1）で、これも全国平均よりも低い。どうやら「ノートに書く」において粗雑さが現れているようである。

(5) 「最後まで努力する」根気強さ

「解答を文章で書く問題について、どのように努力したか」は「最後まで解答を書こうと努力」は65.4（全国平均67.6）とやや低く、「途中であきらめたものがあった」は30.9（全国平均29.1）で「あきらめる」割合が少し高い。

4. 生徒質問紙調査

(1) 生活習慣・学習習慣

① 生活習慣

「朝食を毎日食べている」は「している」が80.6（全国平均82.2）で、この調査で見ると限りやや低い、大きく問題にされるほど低くはない。過去2カ年の動向を見ると、平成19年76.4（全国平均80.5）、平成20年78.7（全国平均81.1）で、 -4.1 （平成19年） $\Rightarrow -2.4$ （平成20年） $\Rightarrow -1.6$ （平成21年）と、全国平均との差を着実に縮小してきている。「朝ごはん運動」の推進の影響だろうが、良くなってきている。

「毎日、同じくらいの時間に寝ている」は「している」が32.1（全国平均28.0）で良好であり、就寝時刻も「午後10時以降午前0時未満」は73.0（全国平均65.9）で全国平均より多く、「午前0時以降」は19.3（全国平均28.1）で全国平均より少ない。つまり、睡眠についての生活習慣は良いということになる。児童質問紙調査の結果とは対照的に良い。

ただ、「学校に持っていくものの確かめ」は忘れ物防止に必要なが、「している」は過去2年と比べると（平成19年度55.3<全国平均65.1>、平成20年度55.9<64.4>）、平成21年度は57.5（全国平均65.3）で、少しずつ差が縮小しているが、依然として差が大きい。このあたりに問題がありそうである。

② 授業時間以外の学習時間と読書時間

「授業時間外の学習時間」（平日）を見ると、「3時間以上」は10.8（全国平均10.2）、「2時間～3時間」は25.1（全国平均25.5）で全国平均とほとんど変わらないが、「30分以下」は12.3（全国平均10.3）、「全くしない」は8.8（全国平均7.7）と低く、「長い生徒と短い生徒との二分化傾向が見られる点が気になる」（浅野誠、「沖縄タイムス」2009年8月28日）といえる。とくに、学習内容が高度である中学校において、「30分以下」、「全くしない」の割合が高いのは問題である。

「授業時間外の学習時間」（土日）を見ると、「3時間以上」2.4（全国平均4.6）、「2時間～3時間」7.9（全国平均10.8）、「1～2時間」16.4（全国平均21.7）と、いずれも全国平均よりもか

なり低い。「30分以下」は29.8（全国平均22.7）、「全くしない」19.2（全国平均14.7）で、大きな差がついている。沖縄県の中学生の約半数は土日はほとんど勉強していないのが実態であり、「土日は勉強しなくて良い」と思っているようである。ここに、全国平均との明瞭な差異がある。

読書についてみると、読書時間は、平日で「30分以上2時間未満」は21.7（全国平均21.8）で、全国平均とほとんど変わらない。「10分より少ない」は11.9（全国平均12.6）、「全くしない」39.8（全国平均39.4）で、これも全国平均とほとんど変わらない。ただ、児童（小学校6年）では、「30分以上2時間未満」は32.5（全国平均29.1）で全国平均よりも上回っていたし、「10分以下」は16.0（全国平均16.9）、「全くしない」は19.2（全国平均21.7）と全国平均よりも少なかったのに、生徒（中学3年）では全国並みに落ち込んでいる。これはなぜなのか、究明が必要である。

「学校図書館・室や地域の図書館に行く」は、「週に1～3回」16.7（全国平均5.7）、「週に4回以上」7.2（全国平均2.2）と、全国平均と比べると圧倒的に沖縄県のほうが割合が高い。「読書は好き」は、「当てはまる」が36.1（全国平均42.1）で、全国平均と比べて低い。児童（小学校6年）では、「読書は好き」は「当てはまる」が47.0（全国平均46.4）で、全国平均と比べて少し高いのと比べると、生徒（中学3年）でかなり低くなっているのは気にかかる。

こうしてみると、全体として沖縄県の生徒は学習時間は「良くしている子」は全国並みだが、「あまりしていない子」は全国平均よりも少し多い。読書時間は全国平均並みで、読書好きな子はやや少なくなっているという結果となっている。児童では全国平均よりも良好だったのと比べると、上位で全国並み、下位で下回っているというのは問題であり、なぜこのような結果になっているのかの究明が必要であろう。

③ 学習塾への通い

「学習塾に通っていない」割合は、44.9（全国平均35.8）で高い。経年変化で見ると、平成19年度52.6（全国平均40.2） \Rightarrow 平成20年度43.7（全国平均35.8）となっていて、平成20・21年度は平成19年度と比べると「学習塾に通っていない」割合

が少なくなっている。児童（小学校6年）と同じく、保護者が平成19年度の「全科目全国最下位」という結果を受けて自発的に学習塾に通わせるという行動をとったのか、あるいは教師が家庭での学習を勧めていることを受けて学習塾通いが増えたのかは、わからないが、そのどちらかの影響で学習塾に児童を通わせる割合が増えたと考えられる。塾での学習が学力調査の得点のどのように影響したのかは、不明である。

(2) 家での勉強方法

① 家での学習内容（宿題、予習・復習）

「家で学校の宿題をしている」は、「している」は年を経るにつれて増加し（平成19年度40.7<全国平均55.6>⇒平成20年度44.4<全国平均53.8>⇒平成21年度48.1<全国平均55.6>）、全国平均との差は縮小しているものの（平成19年度-14.9⇒平成20年度-9.4⇒-7.5）、かなり低い。

「家で学校の授業の予習をしている」は、「している」は9.6（全国平均8.9）でやや高いが、「家で学校の授業の復習をしている」は「している」は21.6（全国平均12.7）で、格段に差があり、沖縄県の生徒は復習に重きを置いて勉強しているといえる。

② 家での学習内容（苦手な教科、テストで間違えた問題の勉強）

「家で自分で計画を立てて勉強している」は「している」が14.1（全国平均11.7）、「家で苦手な教科の勉強をしている」は15.2（全国平均13.5）で全国平均よりも高い。「家で、テストで間違えた問題について、間違えたところを後で勉強している」は12.0（全国平均12.2）で全国平均並みである。ここからは、これらの項目については、沖縄県の生徒は良好で問題は見られない。

(3) 授業への意識と理解

① 国語の授業について

沖縄県の生徒は、「国語の授業は大切」は「当てはまる」49.4（全国平均49.4）で全国並みで、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」は「当てはまる」39.7（全国平均35.8）で全国平均より高い。これに対して、「国語の授業は好き」は「当てはまる」18.7（全国平均19.6）でやや低く、「国語の授業の内容はよく分かる」は18.2（全国平均19.5）でやや低い。

国語の授業は「大切」だし「将来、社会に出て役に立つ」と思っているが、「好き」「よく分かる」という割合はやや低い、という結果である。

全国的にも「国語の授業は好き」「国語の授業の内容はよく分かる」は20%未満であり、低い。国語の授業および授業内容が児童の関心にあっていない、授業内容と児童の理解にずれが生じていることが伺われる。このずれを検討して授業改善につなげることが大切である。

② 数学の授業について

沖縄県の生徒は、「数学の授業は大切」は「当てはまる」43.3（全国平均42.1）で全国平均よりやや高く、「数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」は「当てはまる」35.6（全国平均30.7）で全国平均より高い。「数学の授業は好き」は「当てはまる」は27.7（全国平均26.0）で全国平均よりもやや高い。「数学の授業の内容はよく分かる」は「当てはまる」25.9（全国平均27.0）で全国平均よりもやや低い。

国語の授業とほぼ同じ傾向だが、「数学の授業は好き」は全国平均よりも高くなっている。

数学の授業の何が好きなのか、どんな内容が好きなのか、の詳細な分析が必要である。推測だが、計算練習のほうに偏っているのかもしれない。また、「数学の授業の内容はよく分かる」は全国平均よりも「やや低い」結果となっているが、全国学力テストの結果では平均正答率は抜群に最下位で、しかも下位の成績者が多い。全国学力テストの結果からすれば、普通に考えればもっと「分からない」が多いはずだが、そうっていないのはなぜなのか、究明する必要がある。

(4) 授業での学習活動

① 共同活動と発表・書く活動

沖縄県の生徒は、「グループで調べる活動」「生徒間で話し合う活動」は「当てはまる」が前者5.6（全国平均5.4）、後者12.6（全国平均13.8）全国平均並みに行っている。「自分の考えを発表する機会」も「当てはまる」26.7<全国平均25.2>と全国平均以上に行っている。しかし、「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章を書いたりするのは難しい」は「当てはまる」41.8（全国平均36.8）で全国平均と比べて「困難」の割合が高い。

全国的に見ても中学校では、「グループで調べる活動」「生徒間で話し合う活動」はあまりにもなされていない。もっと授業に取り入れる必要があるだろう。このことは授業内容の精選・絞込み、授業構成の変更を必要とする。「グループで調べる活動」「生徒間で話し合う活動」の取入れがコミュニケーションを活性化し、「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章を書いたりする」ことを促す可能性がある。

沖縄県では、「グループで調べる活動」「生徒間で話し合う活動」は全国平均並み、「自分の考えを発表する機会」は全国平均以上に行われているが、このことが「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章を書いたりするのは難しい」ことの解消に結びついていない。「グループで調べる活動」「生徒間で話し合う活動」「自分の考えを発表する機会」においてもっときめ細かな指導が必要であり、「自分の考えを他の人に説明したり、文章を書いたりする」といった「話す」「書く」活動を意識しての指導がていねいになされる必要があることを示している。

② 国語の授業での「書く」活動

「自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけている」は「当てはまる」13.5(全国平均14.8)、「文章を読むとき、段落や話のまとめごと内容に理解しながら読む」は「当てはまる」17.4(全国平均18.7)で、いずれも全国平均よりもやや低い。

このことと関連しているかどうかはわからないが、「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くのは難しい」は、「難しいと思う」46.5(全国平均40.0)で、全国平均と差が出ている。文章の構成法を教え、習熟させるとともに、400字詰め原稿用紙2～3枚程度の「感想文や説明文」を書く機会を積極的に与え、「書くこと」への抵抗感をなくし、「書き慣れる」必要があるだろう。「(国語の授業で) ノートをしていねいに書いている」は「当てはまる」44.8(全国平均51.0)で、全国平均と比べるとかなり低い。「書くこと」における粗雑さが他のことと結びついているのかもしれない。

③ 数学での学習活動

「問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がな

いか考える」は「当てはまる」32.5(全国平均30.6)、「公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている」は「当てはまる」は31.3(全国平均28.3)で、全国平均よりも高い。しかし、「数学の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書く」は「当てはまる」38.9(全国平均41.6)で、全国平均よりもやや低い。この項目の低さが学力テストの得点の低さとつながっているのかもしれない。

(5) 「最後まで努力する」根気強さ

「解答を文章で書く問題について、最後まで解答を書こうと努力した」は「最後まで努力した」64.2(全国平均69.4)、「途中であきらめたものがあつた」28.6(全国平均24.4)であり、「(数学で) 解答を言葉や式を使って説明する問題は、最後まで解答を書こうと努力した」は「最後まで努力した」41.1(全国平均48.0)、「途中であきらめたものがあつた」は46.5(全国平均42.4)であった。いずれも全国平均と大きな差がある。

5. 学校質問紙調査 (小学校)

(1) 児童の状況

① 勉強への熱意と授業中の落ち着き

「児童は熱意をもって勉強している」は「その通り」は12.2(全国平均23.4)で、全国平均の約5.2割で、大きく下回っている。経年変化を見ると、平成19年度8.5(全国平均22.5)⇒平成20年度10.7(全国平均22.7)⇒平成21年度12.2(全国平均23.4)と、しだいに良くなってきており、「熱意をもって勉強している」児童の割合は少しずつ高くなってきているが、絶対的に少なく、差はそれほど縮小していない。

「児童は授業中の私語が少なく、落ち着いている」は「その通り」16.7(全国平均31.4)で、これも全国平均の約5.3割で、大きく下回っている。経年変化を見ると、平成19年度19.2(全国平均36.1)⇒平成20年度18.0(全国平均33.6)⇒平成21年度16.7(全国平均31.4)と、少しずつ割合が低くなってきている。全国平均も同じ傾向で、カリキュラムの過密・学校生活の窮屈さ・多忙化が影響しているとも考えられる。⁽⁵⁾ この意味で、このことを確認するためにも、児童の側に、カリキュ

ラム・学校生活についての設問が必要であったといえる。

② 読書と学校図書館

「『朝の読書』などの一斉読書の時間を設けている」は、「毎日」が16.0（全国平均20.5）で、全国平均よりは少ないが、「学校図書館を活用した授業の計画的実施」は「週に1回程度」が36.1（17.0）で、全国平均よりも多い。これは、「学校図書館図書基準は達成されている」の「はい」73.0（全国平均50.7）に見られるように、学校図書館をめぐる体制が比較的良く整備されていることによるだろう。

③ 補充的学習サポート

「放課後を利用した補充的な学習サポート」は、「週に4回以上」3.4（全国平均2.0）、「週に2～3回」20.5（全国平均12.2）、「週に1回」34.6（全国平均14.6）で、全国平均と比べてよく実施している。経年変化を見ても、「実施している」は平成19年度82.3（全国平均40.9）、平成20年度83.3（全国平均41.9）で、全国平均の2倍以上実施している。「土曜日を利用した補充的な学習サポート」は「毎週」0.8（全国平均0.2）で、全国的にも平日（月～金）における補充的学習サポートで精一杯で、勤務上の保障、支援体制の確立などが未整備であることに原因があるといえる。

「長期休業期間を利用した補充的な学習サポートの実施」も、「1日から延べ4日」が41.4（全国平均31.8）、「延べ5日から8日」32.7（全国平均18.5）で、全国平均と比べて沖縄県はよく実施しているが、これも夏休み中の仕事の過密状況を点検し、支援体制を整備することが必要であろう。

(2) 授業における学習指導

① 学習規律

「学習規律（私語をしない、話をしている人のほうを向いて聞く、聞き手に向かって話をするなど）の維持を徹底している」は「よく行った」56.7（全国平均57.5）で、全国平均とあまり変わらない。それにもかかわらず、先に見た「授業中の私語」「落ち着き」の状況がよくないと認識している。このことの原因・背景を究明する必要があるだろう。

② 学習指導の方法

「児童の様々な考えを引き出したり、思考を深

めたりするような発問や指導をしている」は、「よく行った」が13.3（全国平均28.9）、「児童の発言や活動の時間を確保して授業を進めている」は「よく行った」が19.4（全国平均38.5）で、全国平均と比べて「よく行った」は半分程度と極端に低い。平成20年度の回答もほぼ同程度である。このような指導が求められているのに「よく行った」が低いのは、改善が必要であろう。ただし、この視点から見ると、「児童の発言や活動の時間を確保して授業を進めている」については、「どちらかといえば行った」は平成20年度51.5（全国平均42.8）⇒平成21年度77.2（全国平均58.9）で、改善の兆候がうかがわれる。

「学習方法（適切にノートを取る、テストの間違いを振り返って学習するなど）に関する指導をしている」も「よく行った」は36.5（全国平均52.1）でこれも低いが、平成20年度が「よく行った」29.8（全国平均49.3）なのと比べると少し改善されているといえる。

「本やインターネットなどを使った資料の調べ方が身につくよう指導している」は「よく行った」23.6（全国平均32.6）、「資料を使って発表できるよう指導している」は「よく行った」17.5（全国平均27.8）、「自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしている」は「よく行った」13.7（全国平均27.2）であり、「よく行った」がかなり少ない。これらの指導の徹底が必要であろう。

(3) 国語の授業における指導事項

「補充的な学習の指導を行った」は「よく行った」13.3（全国平均13.3）、「よく行った」13.3（全国平均13.3）で、全国平均と変わらない。これに対して、「目的や相手に応じて話したり聞いたりする指導を行った」は、「よく行った」11.0（全国平均22.8）、「様々な文章を読む習慣をつける授業を行った」は、「よく行った」11.0（全国平均21.0）で、いずれも全国平均の半分程度の割合である。かなり低いと言わざるを得ない。

「書く習慣をつける授業を行った」は、経年変化を見ると平成20年度14.3（全国平均25.6）⇒平成21年度19.0（全国平均27.0）としだいに高くなっているが、全国平均との差は大きい。「漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業を

行った」は、「よく行った」41.1（全国平均52.0）で、全国平均と比べて「よく行った」が少ない。もっと徹底する必要がある。

(4) 算数の授業における指導事項

「補充的な学習の指導」は「よく行った」35.7（全国平均29.6）で、全国平均と比べてよく行っているといえるが、「計算練習などの反復練習する授業」は「よく行った」47.0（全国平均56.1）で低い。まだ不十分だと言える。

「実生活における事象との関連を図った授業」については、「よく行った」7.6（全国平均7.7）で全国平均との差はほとんどない。平成20年度は「よく行った」7.4（全国平均8.0）であり、少し増えた程度でほとんど変わらない。「実生活の事象との関連」は重要だが、それを意識しての教材開発・授業構成はなかなか難しいのか、進んでいないのが実状である。

(5) 家庭学習

① 国語の家庭学習

「国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」は、経年変化をみると「よく行った」平成20年度54.4（全国平均70.5）⇒平成21年度58.9（全国平均73.8）と、増加の傾向にあるが全国平均と比べるとかなり低い。「国語の指導として、保護者に対して児童の家庭学習を促すよう働きかけを行った」は、経年変化を見ると「よく行った」平成20年度38.6（全国平均38.0）⇒平成21年度42.2（全国平均43.1）で増加の傾向にあり、全国平均と比べるとあまりちがいが無い。

何の目的で宿題を出すのかについては、「継続的な実施や習慣づけのために、家庭学習の宿題を与えていた」は「よく行った」56.3（全国平均63.9）で、全国平均と比べると少し低い。「継続的な実施や習慣づけ」という認識が少し弱いかもしれない。

「授業の内容の定着のために、家庭学習の課題を与えていた」は「よく行った」39.3（全国平均52.0）で、全国平均と比べて低い。「授業の内容と関連させて調べさせたり、発展的に考えさせたりするために、宿題を与えていた」は「よく行った」13.6（全国平均18.8）で、全国平均と比べて低い。全国平均自体もかなり低く、このような状況にまでは至っていない実状にあると言える。

「宿題の評価・指導」だが、「国語の指導として、与えた家庭学習の課題について評価・指導を行った」は「よく行った」平成20年度36.4（全国平均55.7）⇒平成21年度38.0（全国平均55.2）で前年度と比べてあまり増えておらず、全国平均と比べてみるとかなり低い状況にある。

② 算数の家庭学習

「算数の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」は、経年変化をみると「よく行った」平成20年度54.8（全国平均71.8）⇒平成21年度60.5（全国平均74.5）と、増加の傾向にあるが全国平均と比べるとかなり低い。「算数の指導として、保護者に対して児童の家庭学習を促すよう働きかけを行った」は、経年変化をみると「よく行った」平成20年度37.9（全国平均39.4）⇒平成21年度43.0（全国平均43.6）で増加の傾向にあり、全国平均と比べるとあまりちがいが無い。

何の目的で宿題を出すのかについては「継続的な実施や習慣づけのために、家庭学習の宿題を与えていた」は「よく行った」59.9（全国平均65.8）で、全国平均と比べると少し低い。「継続的な実施や習慣づけ」という認識が少し弱いかもしれない。

「授業の内容の定着のために、家庭学習の課題を与えていた」は「よく行った」47.1（全国平均62.0）で、全国平均と比べて低い。「授業の内容と関連させて調べさせたり、発展的に考えさせたりするために、宿題を与えていた」は「よく行った」14.7（全国平均17.6）で、全国平均と比べて低い。全国平均自体もかなり低く、このような状況にまでは至っていない実状にあると言える。

「宿題の評価・指導」だが、「国語の指導として、与えた家庭学習の課題について評価・指導を行った」は「よく行った」平成20年度39.7（全国平均58.0）⇒平成21年度38.4（全国平均55.2）で全国平均・沖縄県ともに前年度と比べて少し減っており、しかも全国平均と比べてみるとかなり低い状況にある。

(6) 研修

「模擬授業や事例研究など、実践的な研修を行っている」は、経年変化を見ると平成19年度39.1（全国平均52.4）⇒平成20年度43.0（全国平均54.4）⇒平成21年度42.2（全国平均55.0）と平成19年度

と比べて伸びているが平成20年度から平成21年度にかけては停滞している。全国平均と比べると、実施状況が低い。

「教職員は、校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させていますか」は、平成20年度25.4（全国平均30.2）⇒平成21年度18.6（全国平均31.8）で、全国平均は微増なのに沖縄県は低下の傾向にある。多忙化が影響しているのだろうか。

6. 学校質問紙調査（中学校）

(1) 生徒の状況

① 勉強への熱意と授業中の落ち着き

「生徒は熱意をもって勉強している」は「その通り」は12.7（全国平均27.6）で、全国平均の半分以下で、大きく下回っている。経年変化を見ると、平成19年度13.1（全国平均17.5）⇒平成20年度12.9（全国平均17.9）⇒平成21年度12.7（全国平均27.6）と、わずかながらしだいに悪くなってきており、全国平均との差が大きくなってきている。小学校では増加傾向であったのと比べると、微減傾向は気になるところである。

「生徒は授業中の私語が少なく、落ち着いている」は「その通り」24.2（全国平均42.2）で、これも全国平均の約6割で、大きく下回っている。経年変化を見ると、平成19年度28.8（全国平均43.9）⇒平成20年度29.7（全国平均44.0）⇒平成21年度24.2（全国平均42.2）で、平成19年度から平成20年度にかけて堅調に増加していたのに、全国平均・沖縄県ともに平成21年度において低くなっているのは気になるところである。教育内容の増加・授業時数の不足にともなって、「私語」「騒がしさ」が増えているようにも思われる。⁶⁾このことを確認するためにも、生徒質問紙に、カリキュラム・学校生活についての設問が必要であったといえる。

② 読書と学校図書館

『朝の読書』などの一斉読書の時間を設けている」は、「毎日」が45.2（全国平均62.3）で、全国平均よりはかなり少ないが、「学校図書館を活用した授業の計画的実施」は「週に1回程度」が7.6（2.7）で、全国平均よりも多いにしても圧

倒的に少なく、月に数回程度（29.3<全国平均13.4>）にとどまっている。それにも拘らず、「計画的実施」が比較的よいのは、「学校図書館図書基準は達成されている」の「はい」51.6（全国平均43.8）に見られるように、学校図書館をめぐる体制が比較的整備されていることによるだろう。

③ 補充的学習サポート

「放課後を利用した補充的な学習サポート」は、「週に4回以上」3.8（全国平均4.2）、「週に2～3回」10.2（全国平均9.4）、「週に1回」9.6（全国平均8.8）で、全国平均と比べてほぼ同程度であるといえる。「土曜日を利用した補充的な学習サポート」は「毎週」0.0（全国平均0.7）、「月に数回」0.6（全国平均1.5）で、全国平均・沖縄県をみても平日（月～金）における補充的学習サポートで精一杯で、勤務上の有給保障、支援体制の確立などが未整備であることに原因があるといえる。

「長期休業期間を利用した補充的な学習サポートの実施」も、「1日から延べ4日」が25.5（全国平均20.1）、「延べ5日から8日」37.6（全国平均35.6）、「延べ9日から12日」は11.5（全国平均13.7）、「延べ13日以上」は7.6（全国平均10.9）で、全国平均と比べて沖縄県は実施日が少ないが、これも夏休み中の仕事の過密状況を点検し、支援体制を整備することが必要であろう。

(2) 授業における学習指導

① 学習規律

「学習規律（私語をしない、話をしている人のほうを向いて聞く、聞き手に向かって話をするなど）の維持を徹底している」は「よく行った」40.1（全国平均56.9）で、全国平均と比べて「よく行った」が低い。学校質問紙（小学校）では、全国平均と同程度であったのと比べると、ちがいは対照的である。そして、平成20年度「よく行った」47.1（全国平均55.0）⇒平成21年度40.1（全国平均56.9）と全国平均が微増なのに沖縄県は低下している。このことの原因・背景を究明する必要があるだろう。

② 学習指導の方法

「生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしている」は、「よく行った」が10.2（全国平均18.4）、「生徒の発言や活動の時間を確保して授業を進めている」

は「よく行った」が14.6（全国平均23.8）で、全国平均と比べて「よく行った」は6割程度と極端に低い。平成20年度の回答もほぼ同程度だが、やや下がっているのは気になる。いまこのような指導が求められているのに「よく行った」が低いのは、改善が必要であろう。

「学習方法（適切にノートを取る、テストの間違いを振り返って学習するなど）に関する指導をしている」も「よく行った」は33.1（全国平均45.0）でこれも低い、平成20年度が「よく行った」36.8（全国平均42.3）なのと比べると少し低下して、悪くなっているのが気になる。

「本やインターネットなどを使った資料の調べ方が身につくよう指導している」は「よく行った」18.5（全国平均23.1）、「資料を使って発表できるよう指導している」は「よく行った」19.1（全国平均19.4）である。「自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしている」は「よく行った」14.0（全国平均20.1）であり、「よく行った」が全国平均の7割程度と少ない。これらの指導の徹底が必要であろう。

(3) 国語の授業における指導事項

「補足的な学習の指導を行った」は「よく行った」21.0（全国平均16.0）で、全国平均よりも高く、よく行っているほうだといえる。これに対して、「目的や相手に応じて話したり聞いたりする指導を行った」は、「よく行った」15.9（全国平均16.5）、「様々な文章を読む習慣をつける授業を行った」は、「よく行った」17.2（全国平均21.7）、「書く習慣をつける授業を行った」は、「よく行った」28.0（全国平均31.5）で、いずれも全国平均よりも低い、小学校と比べるとだいぶ高くなり、全国平均との差が縮小している。

「書く習慣をつける授業を行った」は、経年変化を見ると「よく行った」平成20年度23.9（全国平均29.8）⇒平成21年度28.0（全国平均31.5）とすでに高くなっていて、全国平均との差は縮小している。「漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業を行った」は、「よく行った」43.9（全国平均57.1）で、全国平均と比べて「よく行った」が少ない。もっと徹底する必要がある。

(4) 数学の授業における指導事項

「補足的な学習の指導」は「よく行った」26.8

（全国平均26.0）で、全国平均と同程度だが、小学校と比べると「よく行った」の割合はだいぶ下がっている。「計算練習などの反復練習する授業」は「よく行った」38.9（全国平均48.1）で低い。まだ不十分だと言える。

「実生活における事象との関連を図った授業」については、「よく行った」5.7（全国平均6.0）で、全国平均との差はほとんどなく、全国的にも「よく行った」と言うところまではいっていない状況である。平成20年度は、「よく行った」4.5（全国平均5.7）で、少し増えた程度でほとんど変わらない。「実生活の事象との関連」は重要だが、それを意識しての教材開発・授業構成はなかなか難しいのか、進んでいないのが実状である。

(5) 家庭学習

① 国語の家庭学習

「国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」は、経年変化をみると「よく行った」平成20年度29.7（全国平均37.7）⇒平成21年度28.7（全国平均40.3）と、全国平均と比べて減少という対照的な傾向を示しており、しかも全国平均と比べるとかなり低い。「国語の指導として、保護者に対して児童の家庭学習を促すよう働きかけを行った」は、経年変化を見ると「よく行った」平成20年度17.4（全国平均17.3）⇒平成21年度21.0（全国平均20.2）で増加傾向にあり、全国平均と比べるとあまりちがいが無い。

何の目的で宿題を出すのかについては、「継続的な実施や習慣づけのために、家庭学習の宿題を与えていた」は「よく行った」36.1（全国平均39.8）で、全国平均と比べると少し低い。「継続的な実施や習慣づけ」という認識が少し弱いかもしれない。

「授業の内容の定着のために、家庭学習の課題を与えていた」は「よく行った」31.0（全国平均36.4）で、全国平均と比べて低い。「授業の内容と関連させて調べさせたり、発展的に考えさせたりするために、宿題を与えていた」は「よく行った」19.4（全国平均14.4）で、全国平均よりも高いが、全国平均自体もかなり低く、このような状況にまでは至っていない実状にあると言える。

「宿題の評価・指導」だが、「国語の指導として、与えた家庭学習の課題について評価・指導を

行った」は「よく行った」平成20年度43.9（全国平均48.6）⇒平成21年度38.9（全国平均48.4）で全国平均が横ばいなのに対して沖縄県は低下しており、全国平均と比べてみるとだいぶ低い状況にあるのは気になることである。

② 数学の家庭学習

「数学の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」は、経年変化をみると「よく行った」平成20年度25.8（全国平均43.3）⇒平成21年度25.5（全国平均44.5）と、停滞傾向にあるが全国平均と比べるとかなり低い。「数学の指導として、保護者に対して児童の家庭学習を促すよう働きかけを行った」は、経年変化をみると「よく行った」平成20年度16.8（全国平均17.3）⇒平成21年度19.1（全国平均20.3）で増加の傾向にあり、全国平均との差はほぼ同程度になっている。

何の目的で宿題を出すのかについては「継続的な実施や習慣づけのために、家庭学習の宿題を与えていた」は「よく行った」37.4（全国平均42.1）で、全国平均と比べると少し低い。「継続的な実施や習慣づけ」という認識が少し弱いかもしれない。

「授業の内容の定着のために、家庭学習の課題を与えていた」は「よく行った」35.5（全国平均49.9）で、全国平均と比べて7割程度である。「授業の内容と関連させて調べさせたり、発展的に考えさせたりするために、宿題を与えていた」は「よく行った」10.3（全国平均10.8）で、全国平均と同程度で、全国平均自体もかなり低く、このような状況にまでは至っていない実状にあると言える。

「宿題の評価・指導」だが、「国語の指導として、与えた家庭学習の課題について評価・指導を行った」は「よく行った」平成20年度40.0（全国平均48.3）⇒平成21年度34.4（全国平均47.3）で全国平均・沖縄県ともに前年度と比べて減っているが、全国平均と比べて減少の割合合いが大きい。何が原因なのかの究明が緊急の課題である。

(6) 研修

「模擬授業や事例研究など、実践的な研修を行っている」は、経年変化を見ると平成19年度30.1（全国平均30.9）⇒平成20年度36.1（全国平均33.0）⇒平成21年度26.1（全国平均33.5）と平成19年度

から20年度にかけて伸びているが、平成20年度から平成21年度にかけては全国平均の停滞状況に対して沖縄県は低下している。全国平均と比べると、実施状況が低い。これは何が原因なのかの究明が必要である。

「教職員は、校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させていますか」は、平成20年度22.6（全国平均18.4）⇒平成21年度14.6（全国平均19.3）で、全国平均は微増なのに沖縄県はかなりの低下傾向にある。多忙化が影響しているのだろうか、原因を究明する必要がある。

おわりに

これまで、学力テストの結果概要、児童質問紙、生徒質問紙、学校質問紙（小学校）、学校質問紙（中学校）について、調査結果をもとに個別的に述べてきた。ここで、それらの結果を関連づけて考察し、まとめを述べておきたい。

(1) 学力得点について

児童において2教科・科目（小学校国語B…46位、小学校算数A…41位）で最下位を脱出した事実は、過去2回の全教科・科目全国最下位の報道に衝撃を受けての学力向上への着実な取り組みの成果であると評価してよい。しかし、最下位脱出の教科・科目、とりわけ急上昇した算数Aでの41位は、手続き的知識の獲得による点数向上が推測される。対策問題の反復練習の効果とも言え、喜んでばかりはいられない。概念的理解（意味的理解）をきちんと獲得させる必要がある。他の教科・科目についても言えるように思われる。

(2) 児童の学習状況と学校の指導状況

① 「朝食の毎日摂取」は、過去2回の動向をみると着実によくなってきているが、やや少なく、「就寝時間」は「午前10時以降午前0時未満就寝者」の割合がかなり高く、遅い者が多い。「学校にもっていくものの確かめ」は、それほど差はないが、やや低い。

② 「授業時間外の学習時間」は平日・土日において過去3回とも1～3時間の割合が全国平均よりも高く、よく勉強している。読書についても、読書時間が長く、読書好きな児童が多い。にも拘

らず、学力テストの得点が2教科・科目を除いて全国最下位なのは、学習内容、学習方法、学習環境などに問題がある可能性がある。

教師から見た児童の「熱意をもって勉強」は「その通り」が全国平均の約5.2割で、「授業中の私語の少なさ」「落ち着き」も全国平均の約5.3割であり、問題があると教師は受け止めている。経年変化では漸増しているが、「落ち着き」の割合は前年よりも全国平均・沖縄県ともに下がっており、平成21年度からの学習指導要領の移行措置による授業内容増の影響が考えられる。

学校の指導状況を見ると、「学習規律の維持の徹底」は全国平均と変わらず、比較的良くやっているが、「授業中の私語」「落ち着き」のなさが高いのは、地域性・家庭環境の要素が大きいと考えられる。読書における「学校図書館を活用した授業の計画的実施」「学校図書館図書基準の整備」は全国平均よりも高く、これらによって児童の読書活動の活発さは生じていると言える。

③ 「家で宿題をしている」割合は、全国平均との差は少しずつ縮小しているが、なお低い。「予習・復習」をしている、「苦手な教科の勉強」「テストで間違えた問題の勉強」の割合も高く、良好である。

「家で宿題をしている」割合の低さは、教師の「国語・算数の指導として、家庭学習の課題を与えた」割合が全国平均よりもだいぶ低い（国語で約8.0割、算数で8.1割）ことも関連している。宿題における「継続的实施や習慣づけ」の意義の認識が弱いし、「授業内容の定着」「授業内容との関連づけ・発展的活用」も弱い。また、「宿題の評価・指導」も全国平均と比べてかなり低い。

④ 児童は国語および算数の授業は「大切」で「社会に出たとき役立つ」と思っているけど、それほど「好きでない」し、「わかる」と言い切れる児童は少ない。

⑤ 「グループで調べる活動」「児童間で話し合う活動」は全国平均並みだが、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしている」はやや低く、「問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書く」「ノートをていねいに書く」は低い。そして、「解答を文章で書く問題」については、「最後まで努力」はやや低い。この

あたりに問題点があるようである。

学校質問紙を見ると、「児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしている」、「児童の発言や活動の時間を確保して授業を進めている」割合は「よく行った」が前者で全国平均の約4.6割、後者で約5.0割と、ずいぶん低い。「学習方法（適切にノートを取るなど）に関する指導をしている」、「資料を使って発表できるよう指導している」、「自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしている」の「よく行った」割合も全国平均と比べてずいぶん低い（「学習方法の指導」は約7.0割、「資料を使っての発表の指導」は約6.3割、「分かりやすく文章に書かせる指導」は約5.1割）。これらの指導の少なさが、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしている」、「問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書く」「ノートをていねいに書く」の低さと関連しているように思える。また、先の「好き」「分かる」の少なさも関連しているように思われる。

(3) 生徒の学習状況と学校の指導状況について

① 「朝食の毎日摂取」の割合はやや低いが、経年変化で見ると着実に増加している。就寝時刻も「午前0時以降」は全国平均よりも少ない。児童の調査結果とは対照的に良好であり、「早寝早起朝ごはん」の生活習慣は良いと言える。ただ、「学校に持っていくものの確かめ」は、少しずつ全国平均との差が縮小しているが、依然として差が大きい。

② 「授業時間以外の学習時間」は、平日では、「30分以下」「全くしない」が全国平均よりもやや高いのは二分化傾向として気になるが、全体的には全国平均とほとんど変わらない状況にある。しかし、土日では、「3時間以上」「2時間～3時間」「1～2時間」のいずれをとっても全国平均よりも低く、「30分以下」「全くしない」がかなり高い。沖縄県の生徒は約半数は土日はほとんど勉強していないのが実態であり、「土日は勉強しなくてよい」と思っているようである。

「読書時間」は全国平均と変わらない。しかし、児童では「30分以上2時間未満」は全国平均を上回っていたのに、全国平均並みに落ち込んでしまっているのは、気がかりである。「読書好き」の割

合は全国平均よりも低い。

教師から見た児童の「熱意をもって勉強」は「その通り」が全国平均の半分以下で、「授業中の私語の少なさ」「落ち着き」も全国平均の約6割であり、問題があると教師は受け止めている。経年変化では、「熱意をもって勉強」は漸減しているし、「私語の少なさ」「落ち着き」の割合は前年よりも急減しており、経済不況による学習環境の悪化、平成21年度からの学習指導要領の移行措置による授業内容増の影響などがその原因として考えられる。

学校の指導状況を見ると、「学習規律の維持の徹底」は全国平均よりもかなり低い。とくに平成20年度から平成21年度にかけて急減している。教師の側における移行措置による授業内容増の多忙さも影響しているように思える。読書における「学校図書館を活用した授業の計画的実施」「学校図書館図書基準の整備」は全国平均よりも高いが、『朝の読書』などの一斉読書の時間を設けているは「毎日」が全国平均よりもかなり少ない、これらによって生徒の読書時間の落ち込み、読書好きの割合の低さは生じているのかもしれない。

③ 「家で学校の宿題をしている」は、年を経るにつれ全国平均との差は縮小しているが、平成21年度で7.5%低く、かなり低い状況にある。「予習をしている」割合は全国平均よりもやや低いが、「復習をしている」割合は全国平均よりもかなり高い。

「家で学校の宿題をしている」割合の低さは、教師の宿題付与の状況と関係がある。「国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」は、「よく行った」全国平均の約7割、「数学の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」は「よく行った」全国平均の約5.7割とかなり低い。宿題における「継続的实施や習慣づけのため」は、「よく行った」国語で全国平均の約9割、数学で8.8割と低い。「授業内容の定着」のためは、「よく行った」国語で全国平均の約9割、数学で約7割と低い。とくに数学における宿題の意義の認識が低い。「宿題の評価・指導」も、「よく行った」は国語で約8割、数学で約7.3割と低い。しかも平成20年度と比べて、国語で5.0、数学で5.6%低下しているのは気がかりである。平成21年度からの

移行措置による学習内容増、それによる多忙化が影響しているのかもしれない。

④ 生徒は「国語の授業は大切」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」については全国平均並みにそう思っているが、「国語の授業は好き」「よく分かる」はやや低い。数学の授業については、「大切」は全国平均よりもやや高く、「将来、社会に出たときに役に立つ」は全国平均よりも高い。「数学の授業は好き」は全国平均よりもやや高く、「よく分かる」は全国平均よりもやや低い。

⑤ 「グループで調べる活動」は全国平均並み、「生徒間で話し合う活動」は全国平均以上に行っている。国語で、「自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけている」「文章を読むとき、段落や話のまとめりに内容を理解しながら読む」は全国平均よりもやや低い程度だが、「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くのは難しい」と思う割合は全国平均より6.6（約1.2割）高い。「（国語の授業で）ノートを書いていないに書いている」の割合は全国平均より6.2（約1.2割）低い。数学で、「公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている」は全国平均よりも高いが、「問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書く」は全国平均よりもやや低い。

学校質問紙を見ると、「生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしている」は「よく行った」が全国平均の約5.5割、「生徒の発言や活動の時間を確保して授業を進めている」は「よく行った」が全国平均の約6割で、かなり低い。「学習方法（適切にノートを取る、テストの間違いを振り返って学習するなど）に関する指導をしている」は「よく行った」が全国平均の約7.4割と低い。「資料を使って発表できるよう指導している」は「よく行った」が全国平均並みだが、「自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしている」は「よく行った」が全国平均の約7割とかなり低い。これらのことが先の国語の「授業が好き」「よく分かる」のやや低さ、数学の「授業がよく分かる」のやや低さと関連しているように思える。

(4) 質問紙調査の問題点

質問紙調査は児童・生徒の学習状況および学校の指導状況を全般的にきいていて、児童・生徒評価、学校評価の観点からの質問紙調査になっている。そのためか、児童・生徒の学校生活の時間的過密度・多忙度、学校・教師の時間的過密度・多忙度は質問していない。また、学習指導要領における教育内容の多さ、授業時数の適切度は、児童・生徒、学校・教師に質問していない。これらは児童・生徒および教師の学校生活の充実度、ゆとり度を左右するものであり、それとの関連を無視して考察することはできないものである。

とくに、平成21年度からは2008年改訂学習指導要領の移行措置が導入されており、学校生活が過密になっている実態が、いくつかの項目で前年度よりも下がっていることから伺われる。これらの項目は、学校生活の時間的過密度、教育内容の増加、授業時数増の実態とそれへの意識などの調査がないために、教師が怠けたために低くなったのか、それとも多忙でできなくなったのか、が判別できない。

質問紙調査は毎年のように項目内容の入れ替え等がある。そのため、せつかくの3年間の調査にも拘らず一貫した考察が難しくなっている項目も少なくない。また時間量の割に項目数が多い。項目を精査して、必要な項目にしばって調査をするべきである。

注

- (1) 藤原幸男「全国学力テスト沖縄県結果についての識者評論」、『琉球新報』2007年10月25日。同「<評論>、第2回全国学力テスト、格差縮小も基礎獲得まだ」、『沖縄タイムス』2008年8月30日。同「<全国学力テスト>、識者評論、中止し、学校現場支援を」、『琉球新報』2009年8月30日。同「全国学力・学習状況調査の沖縄県結果の検討」、『琉球大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第15号、2008年3月。同「平成20年度全国学力・学習状況調査沖縄県結果の検討—中学校について—」、『琉球大学教育学部紀要』第74集、2009年2月。
- (2) 「学力テスト、4割を抽出」、『朝日新聞』2009年10月16日付。同記事では、「文科省側では、『4割以下にすると精度が下がり、47都道府県それぞれの成績がどう違うか、大まかな把握が難しくなる』と説明している」と記している。
- (3) データは、国立教育政策研究所のホームページに掲載された、平成19年度、平成20年度、平成21年度の、児童・生徒の、沖縄県（公立）の問題ごとの「調査結果概況」、「設問別調査結果」、「質問紙回答結果集計」、および「学校質問紙回答結果集計（小学校）」「学校質問紙回答結果集計（中学校）」を使用した。
- (4) 耳塚寛明「まなび再考、学力の全国的調査・財政支援に生かすべき」、『日本経済新聞』2008年9月1日付。
- (5) 平成21年度は2008年改訂学習指導要領の移行期間にあたり、小学校で1～6年の算数、3～6年の理科の標準授業時数が増え、適当たりのコマ数も各学年で1コマ増えている。内容の増加については、「各教科等の学習指導上の留意事項」として「特に、移行期間中に追加して指導すべきとされている新小学校学習指導要領の内容については、新小学校学習指導要領の規定により、適切な指導が行われるようにすること」とある（「小学校及び中学校の学習指導要領等に関する移行措置並びに移行期間中における学習指導について」、2008年6月13日）。
- (6) 平成21年度は2008年改訂学習指導要領の移行期間にあたり、中学校でも1年で数学105時間から140時間へ、3年で理科80時間から105時間へと増えている。適当たりコマ数は変わらない。内容の増加については、「各教科等の学習指導上の留意事項」として「特に、移行期間中に追加して指導すべきとされている新中学校学習指導要領の内容については、新中学校学習指導要領の規定により、適切な指導が行われるようにすること」とある（「小学校及び中学校の学習指導要領等に関する移行措置並びに移行期間中における学習指導について」、2008年6月13日）。